

## 論文

現代アメリカ英語における *different than* の位置づけ

丹羽 都美\*

## 要旨

アメリカ英語における *different* を用いた「～とは異なる」という表現について、標準的には *different from* であるが、*different than* を耳にする頻度が近年高くなってきたように思われる。そこで、*different from* と *different than* の出現頻度について *The Corpus of Contemporary American English* を用いて実際の数値を伴った調査を行い、その頻度の変化と共に、*different than* がその割合を増やしている現象の背景にある事柄を考察した。

この背景には、言語使用者が、他者の発話等をもとに推論から新しい規則を導き出す、という規則変化と、母語話者の認識が大きな役割を果たしていると考え、次の二つの側面から分析を試みた。一つは *different than* をどのような表現として母語話者が捉えているか、そして、もう一つは *different* と共起する *from* と *than* の文法的な位置づけという面からである。

「～とは異なる」という表現は少なくとも 2 つの事柄を比べていることから、*different than* は比較の表現の一種であると捉えることも可能である。「主語との比較対象を導く要素が *than* だ」という言語使用者の中での推論が *different than* の増加に関係している可能性がある。

また、「～とは異なる」という表現において、*from* や *than* に後続する要素の分析から、*than* の接続詞という文法的役割が変化してきたことも頻度の変化につながっていると考察した。

## キーワード

*different from*, *different than*, Abduction

---

\* 岐阜聖徳学園大学 外国語学部 教授

## 目 次

## 序論

1. アメリカ英語における「～とは異なる」という表現
  - 1.1 「～とは異なる」と叙述する際の **different** と共起する要素に関する文法的な解説
  - 1.2 アメリカ英語の辞書等における **different** と共起する要素についての解説
2. The Corpus of Contemporary American English (COCA) による **different** と後続要素の組み合わせの出現頻度とその変遷
  - 2.1 COCA による **different from**, **different than**, **different to** の出現数の変遷
  - 2.2 **different from**, **different than**, **different to** の出現数に対する割合の推移
3. 出現数の変化の原因
  - 3.1 「～とは異なる」という語句の意味
  - 3.2 **than** の文法的位置づけの変化

## 結語

## 序 論

言語は時間の流れとともに少しずつ変化する。本論文ではアメリカ英語において「～とは異なる」という表現の際の **different** という形容詞とそれに付随する要素との組み合わせの近年に見られる変化について概観しその背後にある原因について考察する。

第 1 章では、「～とは異なる」という表現を **different** という形容詞を用いておこなう際に共起する複数の前置詞等の存在について、文法書・辞書等にはどのような解説がされているかを概観する。第 2 章では、**different** とこれらの要素との組み合わせと、実際にその出現数の推移やこれらの要素に後続して現れる要素の種類を The Corpus of Contemporary American English というコーパスを用いて検証する。第 3 章ではこれらのデータを参考に、今日のアメリカ英語での **different** と共起する前置詞等とそれに後続する要素についてその背景にある要因を考察する。

## 1. アメリカ英語における「～とは異なる」という表現

1.1 「～とは異なる」と叙述する際の **different** と共起する要素に関する文法的な解説

Huddleston and Pullum (2002) では、**different** を用いて何かとの違いを述べる場合には **from** が通常用いられる、として次のような例を挙げている。

- (1) a. My brushes are different from those used by most watercolourists. [predicative]  
 b. They have an examination system not very different from ours. [postpositive]  
 c. You're answering a different question from the one I asked. [attributive: I]  
 d. Do Catholics have different attitudes from Anglicans? [attributive: II]

(Huddleston and Pullum (2002:1143))

それと同時に、このような場合には to, than と共起することも述べられている。

- (2) a. This version is very different to the one we shall hear in the simulcast.  
 b. %Records provide a different sort of experience than live music.  
 c. %The focus of interpersonal relationships is different in marriage than in a premarital situation.  
 d. %There was no evidence that anything was different than it had been.

(Huddleston and Pullum (2002:1144))

Huddleston and Pullum (2002) においては、例文の先頭に付いている % 記号は「一部の方言においてのみ文法的と見なされる」ということを表している。これはイギリスの出版物であるため、different to についての文法性には特に問題がないが、different than の場合は、% の記号で表されるように、「一部の方言においてのみ文法的と見なされる」として、(2b) (2c) (2d) が示されている。そして、これらについての解説として、different to, different than は different from に比べると極めて頻度が低いということ、than はイギリス英語ではほとんど用いられないが、アメリカ英語では定着している (“well established”) とされている。そして定着しているとはいえ、アメリカ英語においても Huddleston and Pullum (2002:1145) では、まとめると、以下に挙げるような状況があるとしている。

- (3) a. 非常に簡潔な叙述用法、後置修飾用法の場合には共起することがまれである。

?My needs are different than yours.

?We expected a result rather different than this. (Huddleston and Pullum (2002:1144))

- b. than の後に続くのは (2b) に現れている名詞句や、(2c) に現れている前置詞句のような単一の要素である。

Huddleston and Pullum (2002) においては、例文の先頭に着いている ? 記号は「文法性に疑問あり」ということを表している。従って、(2b-d) はアメリカ英語においては文法的に受け入れられているが、(3) の例文はアメリカ英語において文法性に疑問があるということになる。

そして、一方で from, to の場合は名詞句しか後に現れることがないため、(2c) の前置詞句、(2d) のように文が現れる場合を言い換えるためには (4) に示すような名詞化が要求されると解説している。

- (4) a. The focus of interpersonal relationships is different in marriage from what it is in a pre-marital situation.

(Cf. (2c) %The focus of interpersonal relationships is different in marriage than in a premarital situation.)

- b. There was no evidence that anything was different from what it had been.

(Cf. (2d) %There was no evidence that anything was different than it had been.)

(Huddleston and Pullum (2002:1144))

ここでアメリカ英語によく見られる *different than* について解説されていることをまとめると、*different than* の *than* に後続する要素は、節 (文)・名詞句・前置詞句で、単独の名詞や名詞を形容詞句が後置修飾しているものは容認性が非常に下がる、ということになる。

それでは、次に実際にアメリカ英語話者が用法の参考とするアメリカ英語の辞書等から、*different* と共起する要素、及びそれに後続する要素について解説を見ていくこととする。

## 1.2 アメリカ英語の辞書等における *different* と共起する要素についての解説

それではアメリカ英語の辞書で *different* について見てみると、まず、Web 上の Merriam-Webster には *different* の欄に “Is it *different* from or *different than*: Usage Guide”<sup>1)</sup> があり、次のように書かれている。

- (5) Numerous commentators have condemned *different than* in spite of its use since the 17th century by many of the best-known names in English literature. It is nevertheless standard and is even recommended in many handbooks, when followed by a clause, because insisting on *from* in such instances often produces clumsy or wordy formulations. *Different from*, the generally safe choice, is more common especially when it is followed by a noun or pronoun. (Merriam-Webster.com)

ここでは、*different than* と比べれば、*different from* がより一般的で安全な選択肢であるとし、*different than* は 17 世紀以来著名な作家も使ってきたが強く非難される用法であるとしている。しかしながら、また、*different than* をそれでも標準的 (“nevertheless standard”) であり、特に節が後に続く場合は、*from* を使うとぎこちなく冗長になる (“clumsy and wordy”) ため、節が後続する場合は *different than* を使用するのが多くのハンドブックで推奨されているとしている。また、*different than* は標準的であるとし、しかしながら、*different* の後の前置詞等の要素に後続する要素が 1 語の名詞 (“a noun”) もしくは代名詞の場合は、*different than* でない方がよいことを明示している。

ハンドブックということで、一例を見ると、Wilson (1993) は、*different from*, *different than*, *different to* という項目で次のように記述している。

- (6) These three have been usage items for many years. All are Standard and have long been so (*different to* is limited to British English, however), but only *different from* seems never to meet objections: (中略) *Different than* has been much criticized by commentators but is nonetheless Standard at most levels except for some Edited English.

(Wilson (1993:140))

このように、Wilson (1993) では、*from*、*than*、*to* ともに長く使われ、標準となっているとし、*to* はイギリス英語に限られており、*different from* のみが非難を受けてこなかった用法で、*different than* は書き言葉を除けば批判を浴びつつも標準となっているという主旨のことが書かれている。これに続けて、Wilson (1993) は、*than* もアメリカ英語においては *different from* よりは劣るためフォーマルな書き言葉や演説の場での使用は避けることを勧めるが、ほとんどの場面で使用して構わないという標準的な位置づけを持っているとしている。

さらに、American English の立場で *different* と共起する要素について 2 つの辞書を見てみることにする。まず、New Oxford American Dictionary, the third edition においては、*different* と *from*、*than*、*to* との共起について USAGE の欄に以下のような記載がある。

- (7) In practice, **different from** is both the most common structure and the most accepted.

**Different than** is used chiefly in North America, although the use is increasing in British English. Because it can be followed by a clause, it is sometimes more concise than **different from** (compare “*things were different than they were a year ago*” with “*things were different from the way they were a year ago*”). **Different to**, although common in Britain, is disliked by traditionalists and sounds peculiar to American ears.

(Stevenson and Lindberg (2010:484))

このように、New Oxford American Dictionary においては、*different than* の後ろには文が来るが、*different from* の場合は *from* が前置詞なので、同じ表現をする場合は関係節を含んだ名詞句が後続するということを示している。この記述からも *than* は接続詞と考えるのが伝統的な文法の解釈であることがわかる。

次に、The American Heritage Dictionary of the English Language の *different* に関する USAGE NOTE の記載を見てみよう。

- (8) The phrase *different from* and *different than* are both common in British and American English. The British also use the construction *different to*. Since the 18th century, language critics have singled out *different than* as incorrect when used before nouns and noun phrases, though it is well attested in the works of reputable writers. Traditionally, *from* is used when the comparison is between two persons or things: *My book is different from [not than] yours*. Note that noun phrases, including ones that

have clauses in them, also fall into this category: *The campus is different from the way it was the last time you were here.* The Usage Panel is divided on the acceptability of *different than* with nouns and noun phrase, with a majority finding several of these constructions unacceptable. (Pickett et al. (2015:504))

ここでは、*different than* は *than* に後続する要素が名詞・名詞句の場合は、著名な作家がこのような構造の文を書いているけれども、伝統的に非文法的だとされてきており、*from* の場合は (8) の引用の中の例文のように同じ構造は文法的であることが示されている。ここでは、名詞句についても *than* に後続する要素としては非文法的としている点が他と異なっている。

これに続いて、次の *different than* を用いた構文について 2004 年に行った調査結果が記載されている。

- (9) a. Caring for children with disabilities in a regular child-care setting is not new and, in many cases, is not particularly different than caring for other children.  
 b. The new kid felt that the coach's treatment of him was different than that of the other players who were on the team last year.  
 c. New York seemed very different than Rome, where they'd been on good terms.  
 d. The campus is different than it was twenty years ago.

(Pickett et al. (2015:504))

その調査結果によると、*than* に動名詞が後続する (9a) については 57% が、*than* の後に節を含んだ名詞句が来る構造の (9b) は 55% が、(9b) と同じ構造で関係節を含むが、この関係節が継続用法である (9c) は約 60% がそれぞれの構造に対して拒絶的な反応を示したが、*than* の後に完全な文が後続する (9d) に対しては全く問題を感じないという反応だった、ということである。

ここまでで確認できたことをまとめると、以下のようなになる。

- (10) a. 「～とは異なる」という場合、標準的には *different from* ～であり、アメリカ英語では *different than*、イギリス英語では *different to* が用いられることもある。  
 b. アメリカ英語に見られる *different than* は文が後続することは問題なく受け入れられているが、名詞 (単語) は現れられない。また、名詞句ならば問題がないととらえる立場が見た中での辞書等の大勢を占める立場だが、名詞句が節によって後置修飾されるものや動名詞句であれば、抵抗を感じる人が 50% を超える。

そこで、次章ではアメリカ英語において、標準的な *different from* と、(10) のような *than* に後続する要素によって容認性が異なる *different than* を中心に「～とは異なる」という場合の *different from*、*different than*、*different to* の出現頻度について The Corpus of Contemporary American English (以下 COCA)<sup>2)</sup> を用いて比較してみることにする。

## 2. The Corpus of Contemporary American English (COCA) による different と後続要素の組み合わせの出現頻度とその変遷

### 2.1 COCA による different from, different than, different to の出現数の変遷

ここでは、まず、different from, different than, different to という3つの表現について近年どのように変化をしてきたのかについて The Corpus of Contemporary American English (COCA) を用いてその頻度を見ていくこととする。頻度を表した表は上段が1990年から2019年までの各1年間、下段が出現数である。<sup>3)</sup>

まず、different from についての頻度の変化が表1である。

表1 different from の出現数

1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
655	690	731	718	628	676	630	598	730	664
2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009
652	686	676	675	629	647	588	574	562	537
2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
539	613	8698	566	578	617	517	581	559	542

次の表2に示すのが different than の出現数の変遷のデータである。<sup>4)</sup>

表2 different than の出現数

1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
134	141	192	225	183	192	176	196	226	230
2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009
176	185	229	206	199	231	215	222	217	208
2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
230	233	4767	248	253	241	283	316	281	327

年によってデータの母数が異なることもあるが、different from は標準的な表現であるという解説に合致して different than よりも非常に出現数が多いことが明らかにわかる。

different to はこれまでの複数の辞書の解説で概観したとおりアメリカ英語ではほとんど見られないことが次の表3からも明らかである。<sup>5)</sup>

表3 different to の出現数

1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
0	10	9	6	7	4	8	4	6	4
2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009
8	5	7	12	5	8	4	7	10	7
2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
9	8	624	12	13	11	26	13	27	24

これらの表から、イギリス英語では用いられることの多い different to は、第1章で解説通

りアメリカ英語ではまれであることがまずわかる。また、解説通りに、different from が調べた期間のいずれにおいても圧倒的に優勢であるが、different than も 2011 年以降の増加の安定は観察され出現数が増えていることは確実に見ることができる。

## 2.2 different from, different than, different to の出現数に対する割合の推移

それでは、次に、この 3 組の出現数をそれぞれが、「～とは異なる」という表現の中でどのような割合を占めるのかを観察してみることにする。それを示したのが表 4 である。Total (総数) は different from, different than, different to の 3 種類の出現数の総数で、それに対してそれぞれの表現の出現数は何 % に当たるのかを示したものである。<sup>6)</sup>

表 4 different from, different than, different to の「different + 前置詞等」の総数に対する割合

	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
total	789	841	932	949	818	872	814	798	962	898
different from (%)	83.0	82.0	78.4	75.6	76.8	77.5	77.4	74.9	75.9	73.9
different than (%)	17.0	16.8	20.6	23.7	22.4	22.0	21.6	24.6	23.5	25.6
different to (%)	0	1.2	1.0	0.6	0.9	0.5	1.0	0.5	0.6	0.4
	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009
total	836	876	912	893	833	886	807	803	789	752
different from (%)	78.0	78.3	74.1	75.6	75.5	73.0	72.9	71.5	71.2	71.4
different than (%)	21.1	21.1	25.1	23.1	23.9	26.1	26.6	27.6	27.5	27.7
different to (%)	1.0	0.6	0.8	1.3	0.6	0.9	0.5	0.9	1.3	0.9
	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
total	778	854	14089	826	844	869	826	910	867	893
different from (%)	69.2	71.7	61.7	68.5	68.5	71.0	62.5	63.8	64.5	60.6
different than (%)	29.6	27.3	33.9	30.0	30.0	27.7	34.2	34.7	32.4	36.6
different to (%)	1.2	0.9	4.4	1.5	1.5	1.3	3.1	1.4	3.1	2.7

ここでまず、検証のため含めたアメリカ英語にはあまり現れないとされる different to についてアメリカ英語ではどのような出現数の変遷をたどっているのかを見ておこう。先に見たとおり、different to がアメリカ英語で使用される割合は低く、その数値も若干の上下が見られるけれども、全体としては大きく変化はしていない。出現数自体は非常に少ないのは確かであるが、2010 年以降安定してはいないものの少なくともほぼ 1% は出現しており、2016 年、2019 年は 3% と目立たない数ではあるが少し増えていることがわかる。(7) での New Oxford American Dictionary の解説にあるように「アメリカ人には奇妙に聞こえる (“sounds peculiar to American ears”）」ということに加えて、different to は to が from 同様、different と共起する際には前置詞という役割しか持たないため、from が前置詞として一般的に使われ、than が接続詞としての役割を持って from のできない部分を担当している以上、新たな前置詞を用いた表現を導入する必要性が感じられないからということも考えられる。

それでは、different from と different than の % の推移に注目してみると、少しずつ different from が減少し、一方で different than が漸増していることがわかる。1990 年代にはほぼ 80% を占めていた different from が 2010 年代以降はほぼ 60% 台が中心となっており、2016 年は different than がほぼ 35% となっている。

先にふれた Wilson (1993) は出版年が 1993 年であるけれども、先述したように different than は標準的だとしていた。表 4 からすると、1993 年までの different than の出現数は 4 分の 1 未満程度であり、それでも標準と意識されているのであれば、2010 年代以降の出現数の増加は今後 different from との差をさらに縮めていく可能性を秘めているのかもしれない。

2020 年発行の Oxford Advanced Learner's Dictionary の different の項には、次のような記載がある。

- (11) Use of **different than** is now becoming more common in *BrE* as well, especially before a clause because you don't need to use *what* or *how* after *than*. Compare: *She looked different than I'd expected.* ◇ *She looked different from what I'd expected.*

(Hornby (2020:429))

(11) は、同じ Oxford Dictionary であるので、(7) と同じようなことを述べているが、ここでも、different than がイギリス英語で、特に節が後続する場合には、より一般的になってきていること、そして、その理由は different from よりその場合簡潔になるから、とされており、これがアメリカ英語・イギリス英語ともに different than が増加する理由の一端であれば、than と to や from の違いである、「接続詞であること」が from や to ができないことを可能にしているため、その存在価値から割合を増していると見ることもできる。しかし一方で、接続詞 than にとっては、from や to という前置詞にしかできないことは担当できないため、これだけでは増加したことの説明にはならない。

「～とは異なる」という表現の different と共起する要素についてここまで観察できたことは、解説書・辞書による用法説明通りに、前置詞は、from が標準であるが、アメリカ英語においては than も一定の出現数を保持しており、ここ約 10 年間では、from が平均的に 20% 以上出現数を減らしている一方で、than が 15% から 20% 程度出現数を増加し、それが漸次的に継続している状態を保っていることである。

Jespersen (1938) が、古期英語から現代英語までの英語の屈折の消失を概観しながら “This grammatical development and simplification has taken place not suddenly and from one cause, but gradually and from a variety of causes,” (p.169) と述べているが、屈折とは異なるけれども、ここで観察した変化もまだその途中でこれからさらに変わっていく可能性がある。

それでは、本章の観察に基づいて次章ではアメリカ英語においてほとんど変化のなかった different to からは離れて、different than と different from の出現数の変化について見てい

くこととする。Jespersen (1938) が上記で述べているように、この 2 つの表現に関する変化もいくつかの原因が背景にあるのかもしれない。その一つとしては、*from* が前置詞で、*than* が接続詞で、それぞれの文法的な振る舞いの違いから後続する要素が異なるため、ある意味分業して存在していると考えられることはできるが、先ほど述べたように *from* が減少し *than* が増えていることについて、この 2 語と後続する要素との関連からその背後にある事柄について考えてみたい。

### 3. 出現数の変化の原因

本章では、第 2 章で観察した *different from* と *different than* の出現割合の変化には何が作用しているのかを考察する。ここでは、特に *than* という語の位置づけについて注目していく。

#### 3.1 「～とは異なる」という語句の意味

まず、*different than* という表現が少しずつ増えてきたことについて目を向けてみたい。*different* を用いた「～とは異なる」という表現の中で、1990 年代には *different from* が 80% を超えていたが、2010 年代以降はほぼ 60% 台となり、一方で 2016 年以降は *different than* が約 35% を占めるなど少しずつ出現数を増やしているということが第 2 章で観察された。

第 1 章で紹介した Huddleston and Pullum (2002) における *different from* とその他の用法は、Chapter 13 *Comparative construction* というタイトルの章の中で解説されていたもので、比較についての解説から始まる章の中に含まれている。この章立ては英語母語話者の意識の中で、*different from* などの構造が比較と同じような位置づけにあることを示している。

このように *different* が一種の比較であると捉えられているとすれば、比較級と同じように比べる対象の一方が *than* に後続するような語法が生じているところへ、さらに「比べるときはこの表現」というように、一つの語彙 *than* へ統一する方向に向かうことも起こりうる。

Hopper and Traugott (2003) では、Henning Anderson の 1973 年の論文 “*Abductive and Deductive Change*” での言語規則の変化のモデルとそれを修正した Raimo Antila の 1989 年の “*Historical and Comparative Linguistics*” をもとに、話者における規則の変化のモデルを提示している (p.41)。これを要約すると次のようなことになる。

- (12) ある個人 A が発話するのはその人が獲得したある言語の文法である。これを文法 A と仮に呼ぶと、A の発話 1 を別の個人 B が耳にする。そうすると個人 B は普遍的な言語能力と普遍的な推論とを用いてを経て (今聞いた発話 1 をもとに) 一つの文法 (規則) を推測で組み立てる。この組み立てられた規則は A の持っている文法 A とは異なる可能性もある。

そして、この推論には、Hopper and Traugott (2003) では *deduction*, *induction*, *abduction* の 3 種類があるとし、その解説によると、これらの中で *Abduction* (仮説形成) という方法がここに当てはまる可能性がある。*Abduction* とは、*deduction*, *induction* が説明できなかったものが説明できる考え方だとして、Hopper and Traugott (2003) では次のように述べている。

(13) *Abductive reasoning is different, although it is confused with inductive reasoning:*

“*Abduction proceeds from an observed result, invokes a law, and infers that something might be the case.*”  
(Hopper and Traugott (2003:42))

このような言語使用者の推論の実例として、Jespersen (1938) で観察されている *to* 不定詞の構造に対する意識の変化をあげることができるだろう。Jespersen (1938) では、(14) に引用したように、*to* 不定詞を使った表現の繰り返しを避ける場合に、不定詞全体を繰り返さず、“*Yes, I intend to.*” などと *to* だけを残して答えることから、*to* 不定詞の *to* が後続する原形の動詞とで一組になっているというより、むしろ *to* に先行する動詞に属するものだと考えるようになって、それが “*split infinitive*” が生じる現象を説明する一端となる事柄と考えられるとしている。

(14) *Another recent innovation is the use of to as what might be called a pro-infinitive*

*instead of the clumsy to do so: ‘Will you play?’ ‘Yes, I intend to.’ ‘I am going to.’ This is one among several indications that the linguistic instinct now takes to to belong to the preceding verb rather than to the infinitive, a fact which, together with other circumstances, serves to explain the phenomenon usually misnamed ‘the split infinitive.’*  
(Jespersen (1938:197))

*different than* の場合は、*different from* を用いる場面での *different than* を使用した他者の発話に加えて、*different* を比較で用いた時には、*different* は比較の屈折接辞を伴うことなく *more different than* となるため、用例が多くないとしてもこのような語の連続の発話が言語刺激となる場合があるだろう。<sup>7)</sup> このように他者が発話する刺激を受けて、聞いた側が推論から新たな規則として、例えば、「主語との比較対象を導く要素は *than*」という規則を導き出したとも考えられ、このようなプロセスが、*different than* の増加にも働いている可能性はある。

### 3.2 *than* の文法的位置づけの変化

前節では、*different* を用いた「～とは異なる」という表現が比較として意識されているとすると、比較級の構文で現れる *than* も同様の意識で *different* と共起することが類推されて同じように扱うような方向に向かっているのではないか、ということを考察した。

それでは、次に、*different than* がわずかながらも数を増やしていることについて、*different*

from と different than が「違うと感じられなくなっていること」も可能性の一つとして分析してみたい。この場合 different に後続する than と from の文法上の違い、すなわち、接続詞であるか前置詞であるかということに何か変化が生じているのではないかということである。

Huddleston and Pullum (2002) による解説では、(4) に示されたように、本来は、前置詞 from と接続詞 than と品詞の区別があり、また、それに伴って後続する要素には明らかな違いがある。それが近年変化しているかどうか、different than に後続する要素を改めて分析してみることにした。

(3) (7) (8) (9) に示した、different than に後続する要素の制約について実際の状況を把握するため、次に、different than に後続する要素について、文(節)・節を含む名詞句・名詞(単語)・名詞句・動名詞句・前置詞句・副詞句という分類で COCA を使って出現数を調べてみることにする。

表 5 than に後続する要素の分類別出現数<sup>8)</sup>

年	文	名詞	名詞(句) + 節		名詞句	動名詞(句)	前置詞句	副詞句・その他
			+ 節	Wh- 節のみ				
1990	16	12	19	16	59	7	2	2
1991	27	10	13	20	60	6	2	2
1992	26	19	17	8	102	15	1	3
1993	40	22	13	19	114	12	1	3
1994	25	14	11	16	101	7	6	3
1995	37	17	20	11	95	9	2	0
1996	27	20	11	16	88	10	0	3
1997	34	15	17	19	87	19	2	3
1998	26	28	18	10	118	17	5	2
1999	31	22	27	15	113	18	2	2
2000	29	13	17	17	80	13	3	4
2001	39	8	20	12	89	11	6	0
2002	31	17	19	16	122	18	5	1
2003	28	14	24	17	102	15	3	2
2004	25	19	15	21	98	17	3	1
2005	23	23	17	21	122	16	6	3
2006	15	14	22	12	135	11	2	4
2007	25	29	17	20	110	16	3	2
2008	32	30	19	14	110	5	3	3
2009	26	13	22	25	99	18	3	2
2010	42	11	27	28	101	18	0	3
2011	25	21	26	18	117	18	5	2
2012	459	446	431	424	2385	554	26	42
2013	32	24	36	21	110	12	7	5
2014	45	23	22	24	114	20	0	5
2015	37	25	20	31	96	25	3	4
2016	40	23	28	32	122	27	5	6
2017	40	30	35	36	148	18	2	7
2018	25	33	30	28	141	15	2	7
2019	54	28	29	46	140	26	1	3

分類項目の中で、「節を含む名詞句」(以後「名詞+節」とする)に関して、データには多数の先行詞を省略した関係副詞節・*what* で始まる関係代名詞節が現れていた。関係節の場合は先行詞があれば、「名詞+節」となるが、先行詞がない関係副詞節・*what* で始まる場合は間接疑問とも解釈できる。そこで表5のように先行詞がある場合とない場合で分けてみることにした。このような分類についての考慮に関して以下で少し述べておくこととする。

先行詞のない関係節については、母語話者は「名詞+節」の名詞が省略されたものと意識しているかは明確ではなく、見た目は文であるため文と意識しているかもしれない。従って、こちらは容認可能な「文」へ分類するため明らかな「名詞+節」とは区別をした。一方、(9c)に示されたような拒否反応の高い継続用法の関係節は「名詞+節」の中に計上している。また、(9b) *The new kid felt that the coach's treatment of him was different than that of the other players who were on the team last year.* と (9c) *New York seemed very different than Rome, where they'd been on good terms.* を比較すると、(9c)は*than*に後続する要素を修飾する継続用法の関係節で、(9b)は*than*に後続する要素を修飾する句に付随する関係節で役割が異なるが、ここでも *The American Heritage Dictionary of the English Language* (p.504)は「節を含む名詞」(“a noun phrase containing a clause”)としか記載していないため、話者の意識に区別がない可能性も考えてこの二つはともに「名詞+節」とした。

また、上記の*than*に後続する要素を記述した際の「名詞」の取り扱いについて生じることであるが、ここで関係する文を再掲する。

(15) a. %Records provide a different sort of experience than live music. (= (2b))

b. ?My needs are different than yours. (= (3a))

(15a)は名詞句で、(15b)は名詞であるため文法判断が異なる、というものであったが、統語論の立場でこの二つの句の構造を考えるとどちらもNP(もしくはDP)であって異ならないはずである。容認性が下がる名詞の例を再度見てみると、(3a)で*different*への後置修飾の例である ?*We expected a result rather different than this.*も*than*の後に*this*が現れているが、この*this*と(15b (=3a))の*yours*はともに単語の代名詞であり機能語に該当するため内容語に当たる普通の名詞句とは異なるとも考えることができる。母語話者が無意識のうちにこの2種類を区別する働きがあるのかは、上記の例文だけでは明確ではないため、単に「単語」と「2語以上」という区別なのか、機能語と内容語とを区別しているのかを判断する根拠が明確ではない。ここでは、文法書や辞書の記載が“a noun”か“a noun phrase”という表現をしていたことから、「単語」か「2語以上」かという単純な分類をおこなうこととした。

さらに、上記の分類の中で、副詞句・その他の取り扱いについては次のようにした。(2d)の例文 *There was no evidence that anything was different than it had been.*にあるように、*than*の後は重複部分が省略されるため、「完全な文」から異なる部分のみが残された要素だと

考えることができる。これが、名詞句・前置詞句が容認可能な要素であることの説明ともなる。従って、副詞句等は文が省略されたものと考えられることも可能として、容認可能な要素の方へ含むこととした。

このようにして、表 5 の中で、上記の辞書の記述による、アメリカ英語でも文法性に疑いのある構造は *than* の後に名詞・動名詞 (句)・「名詞+節」が後続するものが含まれたものである。それでは、これらの文法性に疑問のある要素が「*different + than*」という構造の出現総数に占める割合について次の表 6 で見てみることにする。

表 6 *different than* の後に現れる名詞・動名詞 (句)・「名詞+節」の割合

年	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
%	28.6	20.7	26.7	21.0	17.5	21.5	21.1	24.0	28.1	29.1
年	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009
%	24.4	21.1	23.5	25.9	25.6	24.2	22.3	26.1	24.1	31.7
年	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
%	24.8	28.0	30.0	29.1	25.7	29.0	27.6	26.3	27.8	25.4

この表では、容認性の下がる要素の出現割合は、年ごとに揺れがある。そういう意味では 1990 年代から 2019 年に至るまで大きな変化は見られていないように見受けられる。ただ、2011 年以降は、1990 年代に見られる 20% 前後という数値が現れることはなく、少なくとも 25% 台で、30% を占めるようになってきている点が、先に見た *different than* 自体の漸次的な増加と平行しており今後同様に増えていく可能性を秘めているのかもしれない。

この *than* の位置づけについて Wilson (1993) では、次のような記述がある。

- (16) The problem lies in the assumption that *than* should be only a subordinating conjunction (requiring the pronouns that follow to be the nominative case subjects of their clauses), and not a preposition (requiring the pronouns that follow to be the objective case objects of the preposition). But Standard English does use *than* as both preposition and conjunction: *She looks different than me* is Standard and so is *She looks different than I [do]*. (Wilson (1993:140))

このように、実際には *different than* の *than* の後に現れるものは、名詞でも文でもどちらでも標準的であるというのが実状のようであり、Wilson (1993) が (16) に示したように、標準英語では *than* は前置詞としても接続詞としても実際使われていると述べていることから、伝統的に *than* は接続詞とされているが、アメリカ英語話者の自覚されない意識の中では、*than* が接続詞だけだったものから、前置詞でも接続詞でもどちらでも使うことができるように変化していることを示している。

The American Heritage Dictionary of English Language に記載された *than* の USAGE

NOTE には、1700 年代より文法家たちがあらゆる用法において *than* は接続詞であるとしてきた、とした後で、この標準的な考え方に基づいて下記の (17a) は (17a') の省略形として現れたものと考えられて、主格が *than* の後に現れることを示している。そして、この規則が同様の省略を用いることで (17b') から (17b) が派生されることを提示している。

(17) a. Pat is taller than I (not me).

a'. Pat is taller than I am.

b. The news surprised Pat more than me.

b'. The news surprised Pat more than it surprised me. (Pickett et al. (2015:1802))

そして、続いて、この分析 ((18) の “this analysis”) に関して次のような説明をしている。

(18) ... But this analysis is somewhat contrived. *Than* is quite commonly treated as a preposition when followed by an isolated noun phrase, and it often occurs with a pronoun in the objective case: *John is taller than me*. In such sentences, using the nominative case (*than I*) can sound unnatural and even pretentious, and objecting to the objective case of the pronoun may sound pedantic. (Pickett et al. (2015:1802))

このように、*than* は前置詞として極めて一般的に用いられ、目的格代名詞と共に用いられることが示されている。そして、従来は *than* の後に省略を経て主語が残る場合には、代名詞であれば、主格が現れるのが文法的であるのに対して、(18) に述べられているように、聴者がそれを「不自然で、尊大で、物知り顔をした」と受け止めるとすれば、主格を使わないようにする方向へ話者の気持ちは向かっていくだろう。

また、(17b') から省略した形式が (17b) ではあるが、言語使用者が接するのは生み出された (17b) であり、このデータから *than* の後には目的格名詞が現れることが可能だという事実だけが認識されるのは避けられないであろう。

この *than* についての用法は比較級の文法解説にも示されている。Murphy (2019) には比較級の *than* の後に現れる語句について、次のような解説をしている。

(19) You can say:

a. You're taller **than me**. or You're taller **than I am**.

(*not usually* You're taller than I.)

b. They have more money **than us**. or They have more money **than we have**.

(Murphy (2019:214))

伝統文法では *than I* が正しい形で、*than me* は誤っているという位置づけだったのが、現代ではそれが逆転して、*than me* が標準で、*than I* は “not usually” という位置づけに変わっている。そして、(19a) では、*than* の後は目的格代名詞一語のみの例文が正しいということを示してさえいる。

実際に COCA を用いた *different than* の後に *than I am* という形ではなく *than I* などの主格だけで節が終わるものは 1990 年から 2019 年の間で表 7 に示す数のみであった。

表 7 *different than* 主格代名詞で節が終わる文の出現数

	I	you	he	she	we	they	it	you and I	you or I	that	this
出現数	2	47	1	0	1	2	0	4	3	73	23

この中で *this*, *that*, *you* の例が特に多いが、これらは文を通して読んで主格とわかる例のみを計上している。この *you* の例の多くは *Subject is (no) different than you.* という文で、他の代名詞にはこのような文が頻出することはない、映像作品・テレビ番組・ネット上のサイトやブログという場で相手に向かって語りかけるというデータソースが多く含まれていることにも一端があるのかもしれない。

*different than that* も 73 例と多かったが、人称代名詞と比べると *that* は次の (20) に示す例のように、*that* が対応するものが語句であったり、思想もしくはそれを文であらわしたものなど、指し示す内容が多様で話者としては使いやすい語彙であることも背景にあると考えられる。以下は COCA からの一例である。

(20) a. They thought *different than that*. (1992 CNN crossfire)

b. Why would *this* moment be *different than that*? (2014 PBS Newshour) (COCA)

また、他の人称代名詞と *this* を含め *that* や *you* との違いは明らかな主格を示しているかどうかという点である。母語話者の意識の中には、主格 1 語のみを *than* の後に残す形式に心理的な抵抗があるが、*you*, *that*, *this* に関しては明示的に主格を示していないため、実際には主語の役割をしていても抵抗感がなく受け入れられていると考えられる。

伝統的には *than* は接続詞と見なされていたが、実情としては接続詞でも前置詞でもあり得るという変化は、先ほど 3.1 で見た規則変化のモデルに沿って起きているのかもしれない。(18) に示されているような心理的な理由で *than* の後に主格のみが来る構造を避ければ、当然のことながら *than* の後に主格のみが現れる文の頻度は少なくなる。*than* の後に主格のみが現れる構造の出現数が減れば、その構造はさらに使われない方向に向かっていく。一方で、比較級の構文を中心として、(19) に示されたように *than* の後には目的格代名詞が現れるのが正しいという発話が多くなれば、この 2 つの流れから *different* の後に *than* が現れた場合には、話者が導き出した「*than* の後には目的格の名詞 1 語のみでも現れられる」という新しい規則が *different* との組み合わせでも定着していく可能性はより高くなっていく。

そして、*from* は前置詞として使われているが、*than* は接続詞だったものから、このように前置詞としても使えるということになって、2 つの用法が 1 語で可能であれば、また、(4) の例文やこれまでの辞書解説の抜粋の中での比較で示されたように *than* を用いた方が *from*

を用いるより冗長にならないとすれば、話者にとっては **than** の方が使いやすい語となってくる。

実際、先述した Oxford Advanced Learner's Dictionary には、different の項の中の、アメリカ英語とイギリス英語での違いを示す欄で、次のように書いている。

- (21) Especially in NAmE: people also say **different than**: *Your trains are different than ours.* ◇ *You look different than before.* (Hornby (2020:429))

この記載では、**than** を用いた構文例に、ours のみが後続する例文が特に文法性や許容性についての解説もなく出され、yours が **than** に後続する (3a) で示した ?My needs are different than yours. とは異なる文法判断になっているとも言える。また、同書では、**than** の項 (p.1620) で、**than** を “/prep, con/” と、すなわち前置詞及び接続詞の用法があるとして紹介している。The American Heritage Dictionary of the English Language (p.1802) では、(18) のような解説はあるものの (8) の中で伝統的には名詞句も非文法的だとした記述にも現れているように、**than** は “conj”, すなわち接続詞としてのみの扱いとなっている。New Oxford American Dictionary の **than** の項は “conj. & prep.” となっており、その USAGE の欄で、次のように述べられている。

- (22) ... *he is smaller than her* is standard in just the same way as, for example, *I work with her* is standard (not *I work with she*). Whatever the grammatical analysis, the evidence confirms that sentences like *he is smaller than she* are uncommon in modern English except in the most formal context. Uses such as *he is smaller than her*, on the other hand, are almost universally accepted.

(Stevenson and Lindberg (2010:1796))

ここまでみたように、辞書にも **than** の位置づけが接続詞とともに前置詞という役割を持っていると記載されるものがあり、このように「新しく導き出された規則」として **than** が文法的な役割を増やして 1 語でより使いやすくなったことも different than という語の組み合わせが今後も増加する可能性を与えている。

ここまで英語母語話者の different を用いた「～とは異なる」という表現に対して、この表現が「主語と何かとを比べて違いを見ている」ことから、比較と同様の表現であるという認識がある可能性をみた。また、より標準的で抵抗感もない different from が少しずつ出現の割合を減らす一方で、反論も多く受ける different than が少しずつ割合を増やしていること背景には、**than** が接続詞という役割に加えて前置詞という役割を持ちはじめそれが定着し始めていることがあると分析した。そして前置詞 from に対して、**than** が文法的な役割を増やして後続する要素の選択肢が広くなり、from よりもより使いやすい要素となってきたことがその出現割合を増やしている一端を担っていると考察した。

## 結 語

本論文では、標準的に *different from* が存在するのに、*different than* という表現を耳にする機会が近年増えてきたことから、この 2 つの表現がアメリカ英語でどのような位置づけになっているのかを実際に出現する数値と後続する要素の変遷に照らし合わせながら考察した。

人間は必ずしも文法書にあるとおりに言語を使用しないが、まず第 1 章では *different from* と *different than* という表現について、伝統的な基準というものを整理した。複数の辞書や文法書の記述をまとめると、*different from* は公式の場での発話や書き言葉では推奨され、標準的な扱いである一方、*different than* は多くの著作に使用されているもののどちらかといえば非難を浴びるが、実状を言えばアメリカ英語では標準的に使われているとあってよい、ということであった。

また、*different from* は *from* が前置詞であるため、名詞・名詞句を後続する要素とし、文章になる内容を述べたい場合は、名詞(句)＋関係節の形で表すこととなっているが、*different than* の *than* は伝統的に接続詞であるため、後続する要素は、文もしくは文のうちの重複部分を省略した副詞句や名詞句等が通常であるとされていた。しかしながら、*different than* の場合には、伝統時には容認性が下がると記述されている 1 語の名詞や動名詞句・「名詞(句)＋関係節」も実際には現れている。

この状況を明確に把握するため、本論文では The Corpus of Contemporary American English (COCA) を利用して、1990 年から 2019 年の間にこれらの表現がどのような分布になっているのか、頻度が変化したのかを実際に数値で確認してみた。イギリス英語には *different to* という表現があるため、この表現のアメリカ英語における分布にも影響がある可能性も無視できないため、確認のため目を向けておいた。

この調査の結果、1990 年代には *different from* が「*different + from/than/to*」の総数の 80% を超えていたが、2010 年代以降は約 60% 台と少しずつ減少し、一方で、2016 年以降は *different than* が 35% 程度を占めるなど少しずつ出現数とともに割合も増加していることが観察された。

このような変化の背景には、他者の発話等から、受け取る側が推論を経て新しい規則を導き出す、という言語が必ず経験する規則変化ということと、英語母語話者の意識における 2 つの側面が関係しているという観点から分析を試みた。

英語母語話者の意識の一つの側面は、「～とは異なる」という表現が「主語と他者とを比べてその違いに言及する」ということから、言語使用者の中には比較と同等の分類にしている可能性があるということである。実際に文法書での分類は比較と同じ項目に入っていることもあ

り、そうなれば、「主語との比較対象を導く要素は *than*」という推論から *different* を用いた「～とは異なる」という表現でも *than* を用いるという新しい規則が導き出されることも起こりうる。

もう一つは、意識の中での *than* の文法上の役割の変化である。伝統的には *than* は接続詞であるが、実際の話者の運用に基づいて、辞書・文法書等には *than* は接続詞でも前置詞でもある、というように変化してきている。

このようなことから、伝統的には *from* は前置詞、*than* は接続詞で、*different from* が標準だったが、*different than* が出現して、その運用の過程を経て、言語使用者にとっては *than* が接続詞と前置詞と両方の役割を果たせるような意識になってきた。そのため、*from* に後続する要素が文表現である場合の冗長さを避けられ、後続する要素についての区別を気にすることなく使用できる *different than* という表現がより使いやすく意識され、それが *different than* の増加につながってきたと考察した。

まだ現在では変化の途中でこの先にどうなるかは断言できないが、このようなことが *different than* の位置づけの近年の変化に関係していると考えられ、*than* に後続する要素の文法的特性に基づくさらなる精密な分類に従った分析がこの現象をより明確にできる可能性もあり、この点が今後の課題と考えられる。

#### <注>

- 1) この USAGE の見出し “*Is it different from or different than: Usage Guide*” は、2つ記載されている *different* のうち最初の *different* のみがイタリック体になっていたため、その通りの記載である。
- 2) The Corpus of Contemporary American English (COCA) は口語・フィクション小説・雑誌・新聞・学術出版物・TV や映画の字幕・ブログ・ネット上のページから文をもとに1億語以上の語彙を含むアメリカ英語のコーパスである。2020年3月に最終アップデートされている。
- 3) COCAにおいて、2012年のデータは他とは異なり非常に母体となるデータ量が多くなっている。また、表内の数値は小数点二位以下を四捨五入したものである。また、重複したデータは気がついた限り除いて計上している。
- 4) *different than* のデータについては、*different to* という語の連続のデータを調べている中で、例えば、1990年のCNNの発話のデータにあるような *Numbers mean something different to you than it does to a guy who doesn't have a job.* などの実際は *different than* に当たるものを *different than* の後の連続で出てきた数値に加えたものとなっている。これらの例は2012年の7例を除いて各年に1つあるかないか程度であった。

また、*more A than B* という比較の構文で、「*more different than* 形容詞の原形」という構文は数値から除いている。

さらに、*different than* と *different from* にはそれぞれの用法の是非について述べているものも COCA にデータが入っているため、この場合は、該当する表現が実際の発話ではなく、どちらが正しいのかという語句として扱われており、それらは *different than*、*different from* の数値からは除外している。

- 5) **different to** に関しては, **different to** という語の連続で検索すると  
 It seems/appears/looks/sounds different to me.  
 というような「~にとって」の **to** と共起している例,  
 … to mean something different to (person)  
 … to add/bring something different to (object)  
 というような something/anything を **different** が後置修飾してそのあとに「~にとって」が現れる場合や, それに加えて **add X to Y**, **bring X to Y** という表現の「(Y) に」というような場合,  
 … something different to do/say…  
 というような **to** 不定詞が **different** に後続している場合,  
 … different to some extent  
 というように **to some extent** というような **to** で始まる成句が後続している場合が含まれているため, **different to** という語の連続のデータからこのような例を削除した数となっている。
- 6) 表 4 の % の数値は小数点第 2 位以下を四捨五入したものである。
- 7) COCA による **more different than** の出現数は, 1990 年から 2019 年の間で, 112 例で, 出現数としては少ない。同じ期間の **more different from** の出現数は 138 例で, **different from** がより標準的だという意識を裏付けている。
- 8) 動名詞については, **snowboarding** のような動名詞というより名詞としての地位を獲得したものは動名詞に含めなかった。また, (3a) でみた形容詞が後置修飾している構造は **different** と **than** の間に要素が入らない構造で検索をしているのでここには含まれてこない。

#### <参考文献>

- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott (2003) *Grammaticalization*, Cambridge University Press, New York, pp.41-42, p.63.
- Hornby, A. S. (2020) *Oxford Advanced Learner's Dictionary Tenth edition*, Oxford University Press, Oxford, p.429, p.1802.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge UK, pp.1143-1145.
- Jespersen, Otto (1938) *Growth and Structure of the English Language*, Basil Blackwell, Oxford, p.169, p.197.
- Pickett, Joseph P., Steven R. Kleinedler, Christopher Leonesio et.al (eds.) (2015) *The American Heritage Dictionary of the English Language, Fifth Edition*, Houghton Mifflin Harcourt, Boston, p.504, p.1802.
- Murphy, Raymond (2019) *English Grammar in Use, fifth edition*, Cambridge University Press, p.214.
- Stevenson, Angus and Christina A. Lindberg (eds.) (2010) *New Oxford American Dictionary, Third Edition*, Oxford University Press, New York, p.484, p.1796.
- Wilson, Kenneth G (1993) *The Columbia Guide to Standard American English*, Columbia University Press, New York, p.140.

#### <参考サイト>

- The Corpus of Contemporary American English <https://www.english-corpora.org/coca/> (最終アクセス日: 2020 年 9 月 10 日)
- Merriam-Webster “Is it different from or different than: Usage Guide,” <https://www.merriam-webster.com/dictionary/different> (最終アクセス日: 2020 年 9 月 12 日)